

この学校でも英語と体育が私の担当教科であり、一生懸命に教えたが英語はよいとして体育を教えると体がすぐ疲れた。食欲も段々と減退した。体重も次第に減って四十四・五キロになってしまった。それでも、若さにまかせて毎晩十二時過ぎまで受験勉強を続けた。実は言い忘れていたが、昔、軍隊にいた頃に何かの儀式があり、その時軍隊が来て演奏したことがあり、その素晴らしい演奏に魅了された私は陸軍軍隊に入隊したくなり、小林という戦友と二人で誰にも内緒で受験したことがあった。その時レントゲン写真を撮られ、『お前は軽度の肺浸潤であり、軍隊は無理だ。』と言われたことがあった。あの時、軍隊に合格していたら別の世界が開けていたような気がする。その肺浸潤が再発していたのである。近くの診療所で診察して貰ったが矢張り軽度の肺疾患があるので無理をしないように、とのことであった。二年間のポンプ小屋生活の無理がここにきて現われたのである。

しかし、ここでへこたれたのでは男がすたる。勇気を出して仕事に勉強にと精進したのであるが、翌年の二月頃には体重が四十二キロに迄減ってしまった。

再度、北大への挑戦である、その挑戦する身は痩せ細り僅かに十貫目であるが、それでも意気軒昂たるものがあつた。しかも幸いなことに、今年は受験場が函館だというので瘦軀に鞭打って函館へと旅立った。

今年も去年と同様に英語、世界史、国語は万点に近い点数であり物理が六十点ぐらい、そして数学は零点に近いと判断した。また、当時は相当嚴重な身体検査があつたもので、むしろその方が心配であつた。

今度は、この前のように嫌な易者にも会わず今度こそ合格確実と確信して橘野に戻つた。そして、校長先生に多分合格すると思うので学校の迷惑にならないように三月一杯で退職すると話し、校長先生も私の勉強振りから大丈夫だろうと激励して下さつた。しかし、私は国立大学というものは一課目でも零点があれば合格させないということ忘れていた。結果は今年もまた不合格であつた。

絶対の確信をもつての受験だったので流石に楽天家の私も完全にダーウンしてしまつた。先生方が心配して下さつたので何とかもちなおし、教壇に立つたのであるが前途は暗澹たるものであつた。

四 社会事業短大の時代

そんな或る日、何気なく見た新聞に岩手県で給費生を募集しているのが目にとまつた。日本社会事業短期大学に岩手県から合格したものに若干の学費を支給するというのである。早速電話で聞いてみると三月末に大学の試験があるという。しかも未だ受験締切まで間があるから、受験票を送るのですぐ手続きをしない、という親切な回答である。そして翌々日に速達で受験票が送られたきた。

大急ぎで必要事項を記入して速達で願書を送つた。日本社会事業短期大学の入試は三月の二十日を何日か過ぎてのことのように記憶している。

橘野から遠野までバス、遠野から花巻まで汽車で行き、そこから東北本線の夜行列

車で上野に到着、山手線で原宿に辿りつき、歩いて東郷神社脇の大学に着いたときは最初の試験時間を過ぎていた。大急ぎで試験場に飛びこみ受験したのを覚えている。試験科目は国語、英語、社会の三科目で北大よりも簡単だなと思った。

試験は二日間に亘って行なわれた。二日目は性格テストと身体検査、それに面接があった。試験が終ると飛ぶようにして郷里の我が家に帰り寝てしまった。

三月もあと一・二日で終るという日、まだ具合が良くないので寝ていると母が枕元に大きな封筒を置いた。開封してみると日本社会事業短期大学の合格通知と入学に関する諸手続きが書いてあり、四月の何日だったか忘れたがその日までに来いというものである。合格通知というものは何時貰っても気分の良いもので、意気消沈していた私は途端に元気が充実してきた。現金なものである、体まですつきとした。

ところで、この日本社会事業短期大学という大学はマッカーサーの命令で設立された大学であり、私立大学でありながら全額厚生省の補助金で運営されており、やく二万坪の広大なキャンパスも校舎も皆大蔵省の管轄する国有財産である。したがって、月謝も国立大学並である。学生数も一学年が五十名余であり一・二年合わせても百名余で、この外に専門学校卒以上の者を専門的に教育する研究科があり、その学生数は三十名ぐらいであった。

何故こんな学校が設立されたかという点、戦後の社会的窮乏化のなかでアメリカ式社会事業を採用しないならば、社会的混乱が増大すること必須と見たGHQが日本政府に勧告して社会福祉主事の養成機関として強制的に作ったもので、修学年限も二年と早くして社会的要請に応えようとして短大としたのである。したがって、入学式とか卒業式などにはマッカーサーこそ来なかったがGHQの民生局長などが憲兵のジープに守られてやって来たものである。当然のことながら学長は厚生省出身の高官であったし、事務局長も厚生省出であった。

また、各県でも社会福祉主事がいないことには福祉事務所が機能しないので、給費生制度を作って、給費生は一定期間自県の福祉主事として福祉事務所に勤務することを義務づけたのである。

校舎は東郷神社側の海軍記念館をそのまま使用していた。海軍記念館は戦争中は海軍の資料を一般に公開する所であるが、実は海軍の秘密機関のあった所とも言われていた。事実、地下室は迷路のようになっており、地下の半分以上は誰も入れないようになっていた。のちに、この秘密の地下室は私によって探検されることになる。

さて、入学が決定した私は早速入学金の工面に泣く始末である。呑兵衛の私は月給の殆んどを本代と呑み代に支出してしまい貯金というものをしなかったのである。

それでも退職金のなにかしかと受験費用の残りとがあったので、それを入学金と学費に廻すことにしたが、肝心の生活費が足りない。母をくどき落として三千円ほど何処からか借りてきて貰ったように記憶している。

愈々旅立ちである。勇躍笈を負うての上京である。宿所は日本社会事業短期大学（長すぎるので我々は社大と言っていた。以下、社大という。）の寮の松窓寮という所に入ることにしていた。この松窓寮は学校のすぐ裏手にあるいまにも崩壊しそうな

二階建の建物であり、当時としては珍らしい男女共寮であり、女は階下、男は階上に宿泊していた。何故、松窓寮などという情緒のない名前かというと寮の周囲に松が生えていたからであり、まさに直訳的表現である。

私は二階の八人部屋に入れられた。二年生が四人、一年生が四人である。食堂が学校の地下室にあり、一ヶ月千二百円ぐらいだったように思う。同室の先輩に秋田出身の今野という人がおり、大変な秀才であり、また、アルバイトも熱心な方だったので早速私もそのアルバイトをお世話して貰った。何分にも働かないと学業を続けることができないので渡りに綱とばかりにお願いした。その仕事というのは当時、学校の二階に同居していた全国社会福祉協議会と共同募金会との全国向け郵便の発送の仕事であり、宛名の印刷、封がけ、発送というもので授業が終つてからやるので三・四日ばかりの仕事であった。それで五百円ぐらいになったような気がする。さらに、今野さんは大井競馬場の警備という仕事もしていた。その仕事も分けて頂き大井競馬場にも行くようになった。これは月に一回程度、約一週間続けての仕事で大体一日二百五十円ぐらいだったと思う。

この二ツの仕事で何とか食堂の払いと煙草代とが稼げた訳でこれで死なないうで済むことになった。

それにしても金がないということは首の無いのと同じぐらい不自由なものである。私と同じような貧乏人がもう一人いた、権ちゃんという徒名(あだな)で今では全国社会福祉協議会の組織部長というお偉方であるが、当時は私と並ぶ貧窮者で生活保護法の適用を申請できるほどであった。夏休みに皆帰省したが私と権ちゃんとは汽车租赁もなく淋しく寮に残留となつてしまった。

二人で淋しく細々と生活していたところに一人の男が現われた。彼もまた極貧で諸国を放浪しているという。余りにも不幸な話に我々はすっかり同情し、なけなしの金をカンパしたのであるが、その彼が帰ってから調べてみると衣類やら何やら我々の全財産がごっそり盗まれたのである。我々二人は今後は如何なることがあつても薄情でなければならぬと決意したのである。

九月の或る日、岩手県から書留が届いた。中を開けて見みると金三万円也の小切手である。これは天地がひっくり返るほどの大金である。その金を何とか銀行でおろしたときは千円札をいくつかに分散し体のあちこちに隠して持ち帰ったほどである。実はこの年、岩手県から数人が受験したが私を除いて全部不合格になつてしまったので、奨学金は全部私一人で貰うことになつたのである、月五千円という大金である。これは助教諭をしていた時よりも千円ほども多い額である。私は歓喜して早速浅草に出かけて学生服と靴と鞆とを買った。また、数ヶ月振りに床屋にも行った。皆私の顔を見間違ふほどであった。

さらに、この金の幾分かて焼酎を買い大宴会を開催した。ポンプ小屋以来の出来事であった。以後、私は送金のあり次第その晩は大宴会を開催することにした。

いまや私は松窓寮のお大人である。なにせ、給費生では沖繩と並んで高額である。この頃から私は大部屋から抜け出して寮の裏手の方にある物置小屋に一人で移り住

むことにした。寮長も反対しなかった。此処は日当りの悪い板床の三畳ほどの広さで誰も好んで入るといふ者はなかったので許したのである。尤も、このことに反対した二年生もいたようであるが、そんなことは私の知ったことではない。

この頃、私の徒名は凡チャンであり、それは恩師高橋梵仙先生の梵をもじったものである。何故かというに私は梵仙先生の真似にかけては天下一品だったので自然と凡チャンになったのである。

ここに小島幸治先生という西洋社会事業史の大先生がおられた。この先生は英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語それに中国語と五ヶ国語がペラペラという語学の天才であり、英国救貧法に關しては我が国髓一という方であり六尺豊かな大男で、こよなく酒を愛され、また、酒呑みの私もこよなく愛され、よく、私の住んでいる小屋の前に来られ、『凡チャン』と呼ぶのである。私は小島先生に連れられて安酒屋に入つては酒を吞ませられ、酒を飲みながら十七・八世紀の英国の社会事情を話して下されその途方もなく該博な知識に驚嘆したのである。

私は寮髓一の金持の癖に今野さんと共にせつせとアルバイトに精勵し、為に学校の方は欠席が多くなつてしまった。余りに酒を呑むので何時も貧血症に悩んでいたのである。すつからかんの空っ尻になり煙草も買えなくなると何人かの学友と原宿駅に行くのである。尤も、時間は最終電車の通過した後であり、ホームから降りて線路沿いに歩いて煙草の吸殻を拾つて歩くのである。当時、原宿にはアメリカ兵のキャンプがあり、彼等の吸殻を拾うのである。二・三百も拾うと数日は間にあつたものである。また、新宿の西口の通称ハーモニカ横丁にもよく呑みに行つた。河野さんという二年生でやくざ崩れの先輩に連れられて行つたのがやみ付きとなり、なにがしかの金を持ち「しの笛」という呑屋に行くのである。そして焼酎の梅割を呑み、焼鳥を何本か食べて帰るのである。たまに呑み過ぎて帰りの電車賃がなくなると歩いて原宿まで高歌放吟しながら帰るのである。しの笛には今でも時折行くことがある。

私は凡チャンという徒名のほかに「三デルカ」という奇妙なあだ名も貰つた。その訳は何時行つてみても、呑んでるか、読んでるか、寝ているか、なので三であるか、と言ふのだそうである。

こうして、我々は目出度く二年生になるのであるが、これからが我々の本番である。権チャンが寮長になつた。一年生に菅原というのと又坂という怪物が入つてきた。菅原は平泉の産であり、一の関高校の出身で私も一・二度会つてゐる。これは東大をドイツ語で受験して失敗した男であり、又坂は函館の何んとか高校を出たやくざであり、朝から晩まで自分の学校の校歌を歌つてゐるので寮生全員が覚えてしまつた。また、二年生で最年長の土屋は老体と称せられ皆から一目おかれていた。今、彼は厚生省の総合リハビリセンターの総務部長として身体障害者福祉の日本の元締として活躍している。

この年、女子寮が校庭の端に完成して彼女達はそつちに移り住むことになつた。

邪魔者は去つたのである。今や松窓寮は完全な原始共産社会と化し、金のある奴等が金を出し、近くの酒屋から焼酎を買つてきては毎晩酒盛りである。酒が回つたこと

ろでストームである。バケツ、金盥、ヤカンに空缶なんでもござれである。鳴るもの総てをかき鳴らし馬鹿踊りをしては女子寮にまで侵入し天下の美女を恐怖の底に落し入れるのである。

また、或る時、金がなくなつたので、どうゆう訳か知らないが校舎の屋上に置いてあつたドラム缶を七・八個ばかり地面に投げ落し、それを屑屋に払下げ、その金で焼酎を買ってきて呑んだこともある。さらに、誰も入つたことがないという校舎の地下室に入る秘密の通路を発見し入ってみたら、なんと驚いたことにビールの空瓶が数百本もあつた。それを毛布に包んで何度も運び出しては酒屋に持って行き焼酎に替え大宴会を開催したこともある。

この頃になると私は殆んど学校に行かずアルバイトに精励し、夜は夜で呑んでは口論をし、哲学を論じ、日本の福祉の将来を案じたのである。

しかし、面白いもので、我々の時代に学生自治会規則も完成したし、帽章もバッジも新たに制定したし、校歌もこの年制定されたのである。また、日本福祉大学との交流もこの年から始つた。また、運動会や大学祭も盛大に実施した。この時代こそ本物の旧制高等学校のバンガラを再現した時代であるという思いがした。

しかし、私の評判は教授の間では最低であり、唯一人小島先生のみが味方であり、落第の危機が迫つていたのである。

だが、凡チャンは仲々の勉強家であり、この年の国家公務員五級職試験（今の上級職試験）の第一次試験に一人だけ合格したが二次試験で吉田首相の悪口を言い過ぎたため不合格になつてしまつた。

さて、卒業の年の二月頃である、私の弟がひょっこりと松窓寮を訪れて来た。彼は我々の大宴会に驚愕したが、それでも良い気になつて皆と酒を呑んでいた。

翌日、弟は田舎の話をしたついでに『照子さんがお嫁に行くそうだ。』それを皆で可愛相だと話している、と言うのである。よく聞いてみると、『本当はそのお嬢さんは嫌いで、昔、仲の良かった精坊チャンの所に行きたい。』といつていふのである。照子さんとは関城中学時代に馬耕稼ぎをしたことのある家の娘で私の初恋の人である。弟が帰つた後で皆にこの話をしたら土屋老体を中心として、『これは大問題である、娘一人の命にかかわる問題である。放置すべきではない。』と言いだした。私が『そんなことを言つても、もう後の祭だ。』と言つと『お前は黙つていろ、俺達でこの問題を解決する。』と言うので仕方なく彼等に任せたら、彼等は協議の結果、菅原を代表として門崎村に送り、照子の父親と談判し東京に連れて来る。老体と権チャンは照子の宿泊先を探す、今、子供の国の総務部長をしている情形は照子の仕事を捜す、と皆で手配をし、さらに大勢でカンパして菅原の旅費を集めた。皆に送られた菅原は上野駅から門崎村へと出発した。結婚式は一週間後に迫つていふという。

数日後に菅原が帰つてきた。一人である。『これはどうしたことだ。』と皆が聞くと彼は、照子の家に行つてみたら家の造作の最中であり、婚礼の支度に大童わであつたという。父親に会つてみたが剣もほろろの挨拶で話にならない。次に照子呼び出したら泣いて、今となつてはどうしようもない、と言うだけで決して東京に行くとは

言わなかつた。次の日にまた会ったが矢張り決心は堅く一緒に来る気配がないので、むなく一人で帰ってきたというのである。

こうして、この話は終るのであるが、後になって円太叔父から聞いたところでは、菅原の来訪に驚いた照子の父は円太叔父に相談に来たという、円太叔父は出来ることならば精坊と一諸にしたらと言ひ、先ず精坊の親父つまり本家から聞くことにして、本家を訪ねたら頑固な本家の親父は大反対であり話にならない、そこでやむなく娘に同意を含めたということであつた。

このことがあつて以後、私は暫く郷里に行けなくなつてしまつた。さて、愈々卒業の時がきた。

教授会はさっぱり学校に出てこず、酒ばかり呑み録なことをしない凡なる学生は三年にすべきという声が高かつたが、他方、来年もあれに騒がれたのでは耐まらん、の意見も出て、最終的には今迄に前例のない訓戒卒業とすることに決定した。

その訓戒卒業というのは高橋精一は卒業式に出る必要はない、但し、卒業後先生方一人一人に対してお詫びをして廻ること、というものである。

結局、私は卒業式の後先生方を廻つて歩き、しこたま嫌味を言われ帰つてやけ酒がぶ飲みしたことを覚えてゐる。

それでもこのはみ出し者は昭和二十八年三月、目出度く卒業して岩手県の福祉事業所に勤務することになつたのである。目出度し、目出度し。

(何分にも古い昔のことなので話が前後していることもあるかと思いますが、その節は平に御用捨ください。)